

PLUS

i

Alius

VOL.1

かながわ
ユースフォーラム



学生部会主催
折り紙教室

深澤ゼミ 角南ゼミ
高井ゼミ 角山ゼミ
ウェルカーゼミ
島川ゼミ



- ・プラスアイには読者に新しい価値や考えを提供する、という意味がこめられています。
- ・Alius は「別の」という意味のラテン語です。

「折り紙教室で日本文化を学んで…」

外国語学部 中国語学科 4年 市川 桃子



折り紙講師中先生から折り紙の折り方などの説明を受けている様子。
正しい折り紙の基礎となる折り方を最初に学びました。



折り紙講師中先生の折り紙のバラの作品や本を展示している様子。飾ると華やかになります。難しいですが、皆さんも挑戦してみてもいいのでは…？



今回、「鶴」「ねじり折りバラ」「ひまわり」の作品3つを2時間の講習で学んだ

日本の伝統文化の一つでもある折り紙ですが、海外でも「origami」という言葉が通用します。

日本の伝統折り紙は多くの種類がありますが、折り方を知っていれば、異文化交流をするきっかけの一つになるのではないかと思います。

折り紙教室を通して、日本文化の理解を深めることができました。

折り紙講師 中一隆さんから分かりやすく丁寧に指導していただきながら、折り紙の知識が増えました。そして、もの作りの楽しさを感じることが出来ました。

中先生は「折り紙のバラとくすだま（日本ヴォーグ社）」などを出版されています。ポスターの写真にも使用させていただいたバラの作品はとても素敵です。今回はバラの作品を学びました。

折り紙教室では3つの作品について指導していただきました。

日本の伝統的な「鶴」と折り紙講師、中先生の作品の「ねじり折りバラ」。夏の季節にぴったりの「ひまわり」を折りました。

「鶴」を折ったことがある人は多いと思いますが、正式な折り方があるのは知っているでしょうか。間違った折り方をしていたら要注意です。

「ねじり折りバラ」は比較的簡単と言われているものの、難しいと感じました。

「ひまわり」は、つぼみから花が咲く様子は可愛い作品でした。

参加者の方から感想を伺いました。

「難しいが、作り終わって楽しいと感じた。」



参加者がわからないところを質問し、講師の方から直接指導を受けている様子。熱心に取り組んでいました。



参加者同士お互いに教えあっている様子。一人で折るよりも何人かで折る方が楽しさはますのではないのでしょうか。

「全然折り紙を折ったことがなかったが、丁寧に先生に教えてもらい、出来た自分に驚いた。」
 「趣味で折り紙を折っていたが、レパートリーが増えた。」
 「折り紙の価値観が変わった。紙一枚でもの作りができる」と理解した。」
 私は折り紙を折ることが好きですが、恥ずかしながら伝統的な鶴の折り方を今まで間違えていました。講師の方に分かりやすく指導していただき、素敵な作品が出来ました。
 これを機に様々な折り紙に挑戦していきたいです。皆さんもよかつたら折り紙を折ってみてくださいね。

つる（伝承作品）の折り方



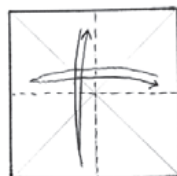
17. 上1枚をたにおり



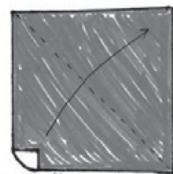
13. 上1枚におりずじをつける



9. 上1枚におりずじをつける



5. おりずじをつける



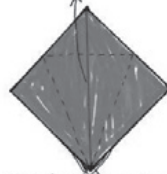
1. 三角に折る



18. なかわりおり



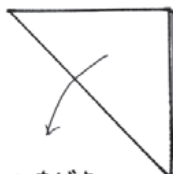
14. ひらげてたたみなおす



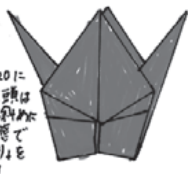
10. ひらげてたたみなおす



6. 向きをかえる



2. もどす



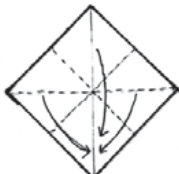
19. なかわりおり



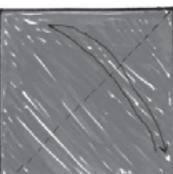
15. 上1枚をたにおり



11. 途中の図



7. よせるようにたたむ



3. おりずじをつける



20. 羽を広げて完成



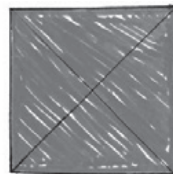
16. うらがえす



12. うらがえす



8. 途中の図



4. うらがえす

社会教育課程 ユースの活動紹介 「かながわユースフォーラム」

神奈川大学には地域づくりを実践的に学ぶ社会教育課程が存在します。その学びの集大成が今回特集する「かながわユースフォーラム」です。
 「若者がボランティアを通して地域の中に入る」そんなきっかけをつくりました。私たちが駆け抜けた三年間。そのダイジェストをお届けします。

かながわユースフォーラムって??

『ユース(若者)が集まって、ボランティアのこと、地域のことを新たに知る。いろんな人の経験や考えを聞きながら、自分ごととして考える。同じ気持ちを持っている人、自分と違う考えの人と交流する。』そんな新しい人・新しいことに出会える機会を設ける場です!

かながわユースフォーラムでは、社会教育を学ぶ学生が中心となり活動しています。そこに教員・地域コーディネーター・地域の人々が集結し構成された、若者地域参画型団体です。

HPやINSTAGRAMで
活動を紹介しています!
是非、ご覧ください♪




社会教育課程って??

社会教育課程は、生涯学習・社会教育の専門職としての「ひととまちをつなぐ人材育成のエキスパート」を育成します。

本課程では、学校外の「ひとづくり」と「まちづくり」の中核となる人材育成を目指し、創造的な学びと世代を超えた多様な活動を展開しています!

「若者による若者のためのまちづくり」

かながわユースフォーラムは、2020年に4つの思いとともに第1回を開催しました。

- ① ボランティアの面白さや学びを知ってほしい!
- ② 新しい自分や地域の課題について考えてほしい!
- ③ 参加者同士や地域で活動する人同士と交流してほしい!
- ④ 地域で活動する団体や地域そのものにかかわってほしい!

ボランティア活動に興味はあるけど、なかなか一歩を踏み出せない...そんな若者に向けてどうすればボランティアのハードルを下げるができるのか。どうすれば若者と地域の交流が盛んになるのか。第1回のかながわユースフォーラムでは、「若者が一歩踏み出す広がるみらい」をテーマにオンラインフォーラムを開催しました。当日は延べ140人の方が参加し、第1回かながわユースフォーラムは大成りに終わりました。

時間	内容
13:30-14:00	開会式
14:00-14:30	第1セッション
14:30-15:00	第2セッション
15:00-15:30	第3セッション
15:30-16:00	閉会式

「ユースと歩む地域の未来」

第2回かながわユースフォーラムは、緊急事態宣言下に始まりました。第2期生の実行委員メンバーが初めて顔を合わせたのは、メンバーが決まってから約五か月後のこと。家から一歩も出ず人と会うことができない状況に、私たちは怒りを覚えるとともに課題意識を強く持ちました。コロナ禍による若者と地域の課題。それは、「希望がない」ということです。そして、2年目のテーマ「ユースと歩む地域の未来」が決まりました。



私たちは当初、「人とのつながりが無い」ということと「コロナ禍の運動不足」を課題に取り上げ、ウォークラリーの開催を予定していました。しかし、コロナによる影響で断念することに。悔しさを残したまま、オンラインフォーラムの開催に切り替えました。

オンラインフォーラムでは、商店街・高齢者・子

人間科学部 社会教育課程 4年 高久李美・山崎裕菜

ども・祭り・ジェンダーの5つの分科会に分かれ、「コロナ禍の今若者にできること」をテーマにそれぞれディスカッションが行われました。大学周辺の多様なステークホルダーと連携し進めたオンラインフォーラムは、延べ160人の参加者を招きました。参加者と直接触れ合うことは叶いませんでしたが、「地域と若者の希望を見出す」という私たちの目的は果たされました。このかながわユースフォーラムという活動は、実行委員にとっても貴重で大切な学びとなり、次の実行委員メンバーに誇りをもってバトンタッチすることができました。「次は人と人が直接触れ合える機会を」そんな思いを後輩に託し、第2回かながわユースフォーラムは幕を閉じました。



「地域の輪を拡げる」

第3回かながわユースフォーラムは、「人と人が直接触れ合える機会」をつくるため、かながわユースフォーラム初の対面イベント型で行われました。そして、商店街・町内会・子ども・スポーツの4つの班に分かれ、それぞれイベントの企画・運営に挑戦しました。今まで、第1回・第2回のかながわユースフォーラムでつくってきた「つながりのその先を見てみたい」という3期生のメンバーの思いから、テーマは「地域の輪を拡げる」に決定。「学生同士の小さな輪から、輪と輪を少しずつつなげていき、地域へと拡がる大きな輪へ。」実行委員はそんな目標を掲げました。

話し合いは難航しました。「やりたいことはたくさんあるのに、話がまとまらない」「新しく地域を開拓するにはどうすれば良いのか」「話し合いがグルグルと同じところを回っている…。そんな感覚でした。そこで、私たちはとりあえず外にでて動いてみることに。zoomで話し合うだけではなく、「まずは自分たちが外に出て地域と触れ合おう」そんな気持ちで私たちはオンラインを飛び出し、神奈川を飛び出し、茨城県へと向かいました。



「神大生×ポニー牧場×商店街」

― 地域とのつながり ―

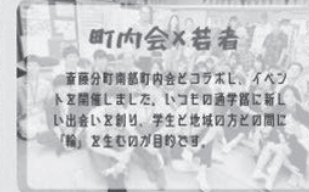
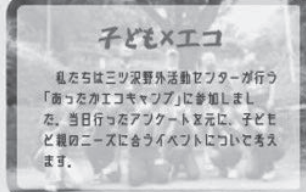
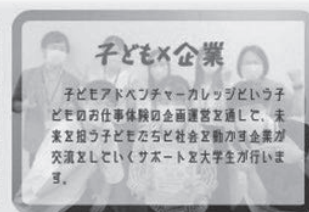
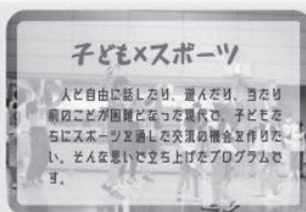
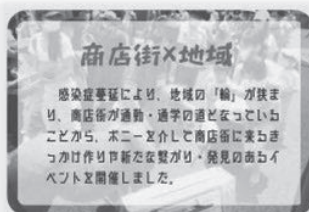
私たちは、茨城県取手市にある「小貝川ポニー牧場」を訪れました。「六角橋商店街にポニーを呼ぼう」という企画構想を現実化するための視察です。この施設のコンセプトは、「小貝川の自然の中で大人も子どもも高齢者も障害者も、時間と場所を共有し、遊び、学び、遊ぶ」です。私たちがこの牧場で学んだことは、実際に触れ合うことの大切さ。ぎこちなかった実行委員たちがほんの少しほどこけたように感じました。人と人、人と動物の触れ合いをかながわユースフォーラムで、そして六角橋商店街でどうカタチにするか。私たちは、ポニー牧場での体験から少しずつ前進し始めました。



「7月9日に向けて」

これまでは、特定の1日に集中開催するイベント（フォーラム）を設定し、そこに向けて授業の当初から準備を進めていくというものでした。今回は、そのイベントに先立って学生でチームを作り、地域の団体と連携するプロジェクトを実行してみようというやり方にチャレンジしました。

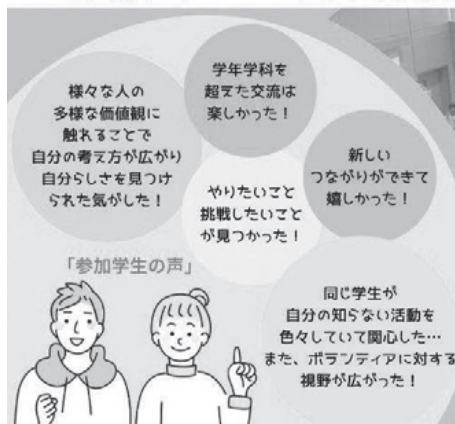
地域づくりやボランティア活動にそれほど馴染み



のない学生たちが、自分の興味関心のあるテーマに分かれます。そして、連携する団体を選定して自らアプローチし、うまく団体側への提案と連携体制が整ったなら一緒に企画を立てて実行していくという流れになっています。

念願叶い…対面開催＊

2022年度



「企画者・実行委員の声」

実行委員 国際文化交流学科 3年 高久 真衣

「何を指して、どんな自分を志して、フォーラムに参加しようと思ったか。」

特に強い目的意識はなかったのですが、みんなで何か1つのものを作り上げる経験をした、色んな人と協力できるような人になりたいという気持ちから参加を決意しました。

「参加した活動は何で、どんな役割を担ったか。どんな成長の自覚があるか。」

横浜市が主催する子ども達のキャリア教育を推進する「こどもアドベンチャーカレッジ」の運営に携わりました。具体的な活動としては、企業と子どもをつなぐ大学生の学生ボランティアを募り、彼らと企業の関係づくりが円滑に進むようにきっかけ作りを行いました。また、7月9日の報告会では全体に向けて分科会の流れ説明と自分が担当する分科会「こども×企業」で発表を行いました。これらの活動を通して、色んな人と協力すること、どうやって協力するのか、自分と感覚や性格の異なる人との関わり方を学べたと感じています。

「どんなことが面白く、どんなことが大変だったか。その大変さをどう乗り越えたか。」

メンバーそれぞれが持つスキル、今までの経験などが異なっていたため、1つの仕事に対しても、出来る人とやったこと無い人がどうやって協力していけば良いのか、どのように本番までの準備

を進めていけば良いのかなかなかつかめず大変でした。しかし、得意不得意で分担を分けたり、分らない部分を教えあったりして協力をしてなんとか本番を迎えることが出来たと思います。また、7月9日の報告会に向けての準備では、普段なかなか交流の機会が無い所属キャンパスが異なる人達とも協力が必要でしたが、キャンパス間の隔たりは決して小さい物ではなく、伝達事項が上手く伝わっていきなかつたり、当日になって判明したことがあつたりと、物理的な距離が離れている人同士が協力することの難しさも感じました。しかし、LINE、電話、zoomなど自分達の持つツールを活かしながら細いつながりを維持し、当日には、直接会場で顔を合わせて最終確認や情報共有を行うことで成功を収めることが出来たと思います。

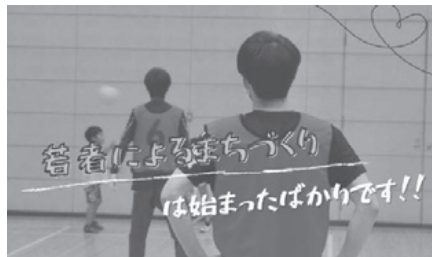
「この活動や経験は、未来のどんなことにつながっているか。」

私はユースフォーラムでの活動、経験を通して、本当の意味で人の多様性を経験し、多様性を認めるとはどういうことなのかそれを知るきっかけをつかめたのではないかと感じています。色んな人がいることは普段生活している中で感じていることではありますが、実際に一つのプロジェクトに向けて活動することで、それぞれのパーソナリティが見え、時には受け難い性質を持っていることが分かって同じメンバーとして活動しなければならぬ場面も少なくはありませんでした。この経験を通して色んな人と関わっていくことがどういうことなのか少し知ることが出来た

と思います。そして、この経験は自分の研究テーマでもある「多文化共生」を考える時にも一つのきっかけになるのではないかと感じています。この感覚を大切にこれから始まる多文化共生の個人研究にも活かしていけたらなと思います。

「今後に向けて」

かながわユースフォーラムは、第3回目にしてついに対面開催を実現しました。「地域に輪を広げる」というテーマのもと、学生の小さな輪から地域を巻き込む大きな輪へと発展しました。今後は、その大きな輪をつなぎ続けること、その輪をさらに大きくしていくことを目指します。実はつながりをつくる



ことよりも維持していくことの方が大切。私たちは若者と地域がつながる「きっかけ」をつくつたにすぎません。しかし、そのきっかけが地域ののびしろを変えたと私たちは信じています。つながりの輪を維持するために、「きっかけ」をつくり続けていきます。

「活動紹介 くゅっぴーの虫取り講座」

実行委員 自治行政学科 4年 高橋 侑佑

8月24日、虫好きである私は子ども達と虫取りをするという最高の時間を過ごしました。夏休み期間を利用し、神奈川区にある片倉うさぎ山プレイパー

クで昆虫採集を実施しました。当日は天気にも恵まれ、子ども達は沢山の虫を捕まえていました。夏休み後半ということもあり、宿題を少し気にしながら虫取りに専念している子を見ると、昔の自分を思い出します。そして、クワガタやセミなどをみつけて喜ぶ姿をみて開催して本当に良かったなと思いました。

今回利用したプレイパークのような自然が残る環境はとても貴重で、特に都市部に必要だと感じます。もちろん、虫に触れない子どももいましたが、ボランティアに来てくれた大学の仲間と、水遊びや焚き火、刀作りなどの自然を活用した様々な遊びで楽しい時間を過ごしていました。子ども達に会った際、「久しぶり!」と声を掛けてくれた子もいてとても嬉しかったです。というのも、本企画の対象は神大寺学童さんの子ども達であり、以前に開催したかながわユースフォーラムの活動等で交流があったからです。今回は、コロナ禍で遊びが制限されている問題を解決すべくスポーツ大会を開きました。今後子どもたちと交流できる貴重な機会を大切にしていきたいと思っています。



「かながわユースフォーラム」に参加して ―社会教育課程 地域デザイン―

外国語学部 中国語学科 3年 久保文乃

かながわユースフォーラムとは、2020年度に『ユース（若者）が集まって、ボランティアのこと、地域のことを新たに知る。いろんな人の経験や考えを聴きながら、自分ごととして考える。同じ気持ちを持つている人、自分と違う考えの人と交流する。』そんな新しい人・新しいことに出会える機会を設ける場です。

今年度は、3年目の活動ということでしたが、これまででは横浜キャンパスでのみの活動だったため、みなとみらいキャンパスでの活動は初めての試みでした。



この写真は、3月にみなとみらい地域を街歩きした時のものです。(2022年3月10日) その後、3月の間はみなとみらい地域の課題を調べ、どういったアプローチをすればその課題が解決されるのか、どういった企画を行えば地域が活性化されるかといった話し合いを定期的に行いました。

昨年、12月末にコアメンバーが決定しました。今年、1月からの2ヶ月間は、横浜キャンパスのメンバーと一緒にこの活動の大枠のテーマを決めていきました。その大枠の骨子は、1月に話し合いをしていく中で、新型コロナウイルスの影響で人との繋がりが希薄になってしまっているということ、またかながわユースフォーラムという団体が多くの人との繋がりを作る場所に、多くの繋がりがこれからも出来るようにという意味を込めて、「輪を広げる」になりました。ここからどういった活動を行っていくのか、分科会に分かれて、それぞれの詳細決めが始まりました。

分科会は、授業や人数の関係から、みなとみらいキャンパスでは一つの分科会を立ち上げました。みなとみらいキャンパスの分科会としての活動は3月から始まりました。みなとみらいという地域は、どういった地域なのかを知るために、街歩きを行いました。

私たちは、子どもとの交流をしたいと考えていたことから、その点に絞って、どのような課題があるかを考えました。しかし、大学生に解決できる課題は無いという結論に至りました。そこで横浜市役所が子どものために実行している企画を自身で行い、子どもと関わり、企画運営をすることで新たな課題等が見えるかどうか、次年度に繋ぐために何が出来るかという方向性に向かっていくことになりました。

新年度を迎え、みなとみらいキャンパスは3年生が五人という少人数の中、先生や地域コーディネーター、先輩のお力添えを頂き、子どもアドベンチャーカレッジの企画運営を行っていくことに決まりました。

子どもアドベンチャーカレッジというのは、市内の小学生に向けて、「主体的・対話的で深い学びのきっかけづくり」「社会参加のきっかけづくり」の場と機会を提供するため、民間企業や団体、大学、公的機関などの協力を得て、夏休み体験学習プログラムを実施するというものです。具体的に言うと、子どもが地域にあるお仕事を体験してみようというものになります。

私たちは大学生コーディネーター同士の交流や、大学生コーディネーターと企業の交流が円滑に進むように、アイスブレイクやチームビルディングを計画して、企画運営をしました。そのため、4月が準備期間、5月が横浜市役所との打ち合わせ、6月に



この写真は6月21日に行われた、子どもアドベンチャーカレッジの企画運営をした時の写真です。

企画の運営の実施をしました。この6月の企画は、大学生コーディネーター同士の交流やそのコーディネーターと企業との交流の場で、どのような企画をしたら仲がより深まるかということを考え、アイスブレイクを企画し、実行しました。

そして7月にながわユースフォーラムの全体会で活動報告をしました。

私は、今回、みなとみらいキャンパスの代表を務めさせて頂きました。新型コロナウイルスの影響で、家にいる生活が長く、何か新しいことに挑戦してみたいと思ったこと、また現在の自分では、どういつ

たことが出来るのかという自分の中の挑戦をしてみたいという2点から立候補をし、ながわユースフォーラムに携わりました。

代表になる上で、みなとみらいキャンパスは1年目の活動ということもあり、同じ熱意で、参加メンバーが全員、楽しく活動に取り組んでいけるようにするということを念頭においていました。

今回の活動を通して様々な貴重な経験をさせて頂きました。

その中で、みなとみらいという地域における課題の発掘と子どもアドベンチャーカレッジの企画運営の2つの観点で、私の感想を綴りたいと思います。

1つ目の観点、みなとみらい地域の課題の発掘は、3月の間の大きな課題でした。これまでの2年間のながわユースフォーラムの活動は、分科会ごとに一つの課題を取り扱うという形で、様々な分科会が成立していました。しかし、みなとみらいキャンパスの所属メンバーは横浜キャンパスメンバーに比べて少ないため、複数の課題に取り組むことは難しい状況でした。その中で、どういった課題を見つけ出して、取り組むたいのかという部分を絞り込むところから始まりました。まず、みなとみらいという地域にどういった課題があるのかを知った上で、次に参加メンバーがそれぞれどういった課題に取り組んでみたいのかという調査を経て話し合いを行うことの難しさがありました。何故難しかったかと言うと、関わるメンバーの興味を抱いている分野が違っていたからです。また最終的には取り組むことを絞っていかねければならず、それぞれの観点一つひとつを組み合わせることも考えることはとても大変でした。

また、全員が納得して進めていくために、周囲をよく見て動いていくことがこれまでにない経験でした。ここで経験出来て良かったと強く思っています。

2つ目の観点、子どもアドベンチャーカレッジの企画運営は、4月から6月までの間におこなってきました。第1に難しいと感じたこととして、この企画以外にそれぞれが授業や課題、アルバイト、課外活動等が多くあるということです。一つのことだけに集中することが出来ないものの、しっかりとしたクオリティーの物を作り上げるために、平等に仕事を振るのではなく、それぞれの抱えているものに配慮した上で、割り振って行ったりすることが難しいと感じました。また、企画運営において、当日、予想外の事が起こることはつきものです。シンキングタイムの際に、静まり返ってしまった空間に音楽を持参すれば良かったという反省点も見つかりました。体験しなければ見つからなかった反省点と出会えたことは、私の中でとても大きな糧になりました。

このような反省点は、体験しなければ知らなかったことです。そして、このようなことがあっても、楽しく活動が出来、その上で成功を収めるということが出来たのはそれぞれがしっかりと話し合って役割を全うしたこと、多くの人の支えがあったということだと私は考えます。

今回の経験を通して出来た繋がりが、私は得られたものの中で一番の大きなものだと感じています。この繋がりと経験を生かし、今後に生かしていくと同時に、次の世代に繋いでいくための活動をこれからはしていきたいです。

地域おこしは縁むすび。

国際日本学部 歴史民俗学科 2年 伊藤千夏



2021年10月末の多摩センターでのジオラマ製作イベントの様子



制作したパネルアート



2021年12月におこなったみんなの美術作品展にて撮影。「くろどら」のパネルアートの前に立つ筆者

私は地元である東京都多摩市を拠点に地域活動を取り組んでいる。私が得意とするのはアートで人と人を繋げること。趣味である創作活動に人を惹きつける力があると知り、所属している多摩市若者会議という地域おこし団体の中でアートイベントを企画するようになった。

――初めて企画したアートイベント――

2021年10月末、サッカーチーム東京ヴェルディのイベントの一つとして、多摩市のジオラマづくりを行った。多摩市内の伐採木やどんぐりなどを用いて作る未来の多摩市のジオラマは子どもたちの想像力で素敵な作品になった。完成したものは、11月のヴェルディの試合日に味の素スタジアムに展示をさせてもらった。

――誰かの日常になるアート――

2021年末には多摩市の諏訪名店街と永山団地名店街の空き店舗をお借りして、2メートル四方のパネル3枚に油絵の具とアクリル絵具で1ヶ月間パネルアートのライブペインティングを続けた。12月に行われる市民美術作品展へ向けての新たな試みの一つとして取り組んだ。私だけで進めるには期限内に完成させることが難しいと判断し、まずは人数集めから始めた。高校時代の友人を中心に連絡をし、造形物制作が得意な子、油絵が得意な子、デザインが得意な子……多様な友人を集め、それぞれにあった役割を分担した。

「油絵ってどんな絵具なの？」と返ってきた。私にとってこの返事は衝撃的であり、油絵具に触れる機会が他の絵具以上にならないことを気づかされた瞬間だった。どうにか油絵がもつ身近なものにならないかと思い、油絵を1ヶ月間ひたすら描き続けた。通りかかる子どもたちには油絵を実際に体験してもらい、近所の方々から絵のアドバイスをもらうこともあった。中には、毎日同じ時間に「写ルンです」で制作風景の写真を撮り、次の制作日に現像して持ってきてくれるおじいさんもいた。その方に言われた「この作品作りを見に来ることが日課になっていて、毎日の楽しみなんだ」という一言が非常に印象に残っている。私のアート活動が誰かの日常になっていたことを嬉しく思う。また、作品はフォトスポットになるようなデザインにし、その中の一つは商店街にある青木屋という和菓子屋の黒糖生地のどらやきである「くろどら」をモチーフにした。

私が描いている姿を見てどら焼きを買に来てお客さんもいたそう。アートは人と人を繋ぐ。誰かの日常にもなりうる。

――公園をキャンパスに――

2022年3月には多摩中央公園の活用方法を提案するイベントの一つとして企画を立てた。「青空ペインティング」と表し、テントや大きなキャンパスなどに絵具を使って絵を描いてもらった。

準備に手間取り、上手くいくのか心配だった

たが、結果は大盛況。キャンバスいっぱいの花やカラフルなテント、さまざまな動物の絵で公園が彩られた。子どもの頃、絵を描くとなると、どうしても学校やアトリエなどの室内で描きがちだった。もっと開放的な場所では描いたら、新しい発想が浮かぶのではないかと考え、今回の企画を実行した。

――◎まちづくりは縁結び――

今挙げたのは企画の良い部分だけ。もちろん、企画を進めるにあたって、何度も失敗をした。

ジオラマづくりのイベントでは、初めてイベントを企画するというのもあって、何から手をつければ良いか分からなかった。その結果、イベントの前日の夕方に慌てて買い出しをし、子どもたちが使いやすいサイズに木を切り、他にも材料を用意し……とやることをとことん詰め込んだ。挙げ句の果てにイベント日に雨が降った。震えながら、子どもたちとイベントをした。

ライブペインティングでは、大学の授業の合間に絵を描きに行き、家に帰ったら進捗状況などをまとめて共有し、手伝いに来てくれる子たちのシフトスケジュールを組む。さらにこの合間にパイトや入院中の母の元へ面会に行った。もつと余裕を持って始動していればと何度もあった。

青空ペインティングではイベント日が迫っている中、キャンバスやテントを自主制作したため、とにかく寝られない、とにかく安全に作らねばと必死だった。なれない釘打ち。なぜあんなにも簡単に木



3月の青空ペインティングの様子

が割れるんだ。テントのために、布を縫い付けるにもミシンがないから手縫いでやり始めるのも一向に終わらない。考えてみたら「いや、テントを手縫いで3日間かけて作りまして……」なんて言っている人は現代で私くらいだろう。

そんな失敗や身を減ぼすようなスケジュールがあっても、無事どのイベントも成功できたのは周りの力とイベントの運営の楽しさがあったからである。私1人ではとても出来ないが、毎日手伝いに来てくれる友人や若者会議のメンバーがいる。毎日絵を描いていると、温かい言葉や若者会議メンバーが美味いままかないを作ってくれる。そうやって支えてくれる人が1人でもいるだけで、「この人にたくさん笑ってほしいから頑張ろう」と活力になるのだ。だからといって身を減ぼすスケジュールを肯定するつもりはないが。

そして、イベントを運営していると、人と人との繋がる瞬間を何度も目にする。その瞬間が何よりも好きだ。この文章のタイトルに書いたとおり、地域おこしは縁むすびである。ライブペインティングを見た、通りがかりの人からグループ展示に誘われ、作品展示をしたこともあった。若者会議に入っていたから多摩の歴史や文化に詳しくなり、その学びは歴史民俗学科での勉強に活かしている。そして何より、幅広い世代やさまざまな職の人たちと関わったことで、伊藤千夏という一人の人間がポジティブで行動力のある人間になれたのが一番の縁と言える。

――◎ガチャガチャで人と地域を繋げる――

今、動き出している企画はガチャガチャでまちづくり。ガチャガチャの商品デザインをする夢を抱く同じ多摩市若者会議の立花柚月さんと共にスタートを切った。彼女と共に立ち上げたプロジェクトは「たまごろりん」プロジェクト。多摩とガチャガチャのころころとした見た目がその名の由来である。ガ

チャガチャのカプセルの中に多摩市内の商品情報やクーポンを入れ、ガチャガチャの機械を駅前設置。利用者はガチャガチャをまわし、出てきたカプセルの中に書かれたカフェに訪れるという偶然且つ運命的な体験をすることが出来る。

クーポン以外にもさまざまな仕掛けを施し、多摩市内の飲食店だけではなく、多摩市内を巡ってくれるような仕組みを考えている。

「たまごろりん」を多摩地域活性化のアイデアコンテストに応募し、一次審査を通過。多摩地域の企業との連携が始まり、2022年の10月から京王聖蹟桜ヶ丘駅の改札前に設置開始予定だ。長く続けられる企画にしていこう。

――◎さいごに――

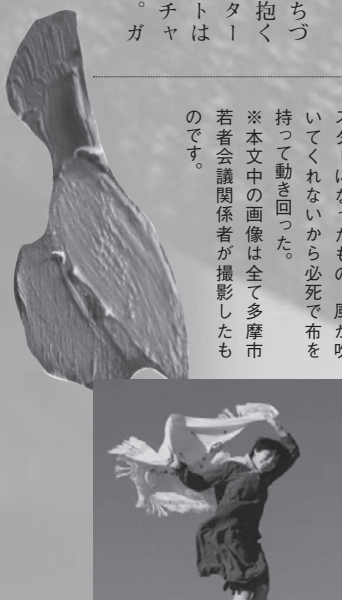
地域おこしは地域をより良くすることになるのはもちろん、自己表現の場にもなる。自分が好きなことを地域の形に当てはめて、本気で取り組めば必ず地域と企画者の両者の心に花が咲く。そしてご縁が生まれる。

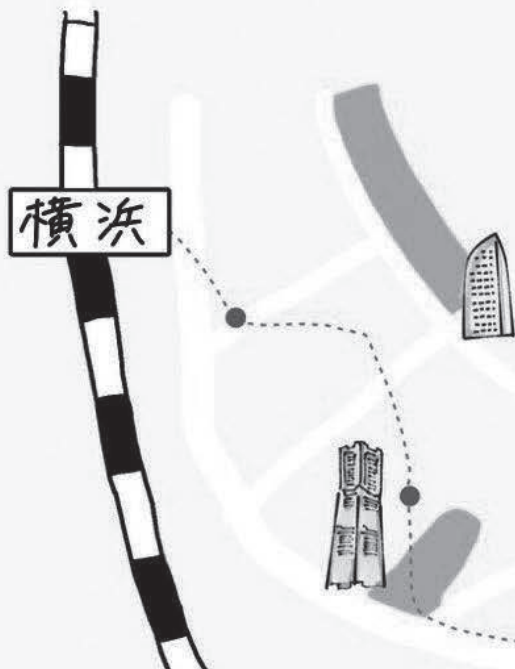
筆者の地域活動はまだまだ続く。多摩だけではなく、神奈川大学のある横浜のような、多摩とは条件の異なる地域でも活動していきたい。

【筆者・伊藤千夏】

国際日本学部歴史民俗学科2年。地域活動と商店街めぐりが好き。「ご縁」だと思いついて、誘われた地域団体にはすぐ入ってしまう能力を持っている。写真は多摩市若者会議の宣伝ポスターになったもの。風が吹いてくれないから必死で布を持って動き回った。

※本文中の画像は全て多摩市若者会議関係者が撮影したものです。





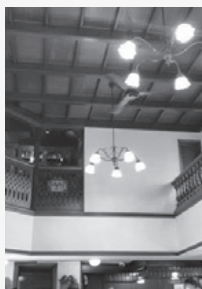
みなとみらい周辺の喫茶&カフェ

キャンパスのある周辺には昔ながらの喫茶店もあればモダンなカフェもあり魅力が盛りだくさん。その中でも中国語学科学生の一押しのお店をご紹介します。

イラスト・編集：水越悠里、太田有美、嘉瀬紗弥加、
木村夏菜、樋渡みほな、柳川寿桃、山田あゆみ

①馬車道十番館

ガス事業の創立者・高島嘉右衛門家の旧跡に建てられた喫茶室。店内に入ると一瞬で気持ちは明治時代に！



①馬車道十番館

馬車道から少し外れた通りに入ると、明治の西洋館を感じさせる建物を発見。ガス灯と電話ボックスが目印の馬車道十番館。1階の喫茶室では丸いフォルムが可愛いショートケーキやハイカラな雰囲気を感じるクラシックプリンなどの甘いスイーツ、開港カレーや喫茶店定番のたまごサンドなどの軽食まで豊富なメニューを楽しむことができる。店内は吹き抜ける空間で天井から吊るされたクラシカルな照明や重厚なソファ、店員さんの着こなす制服からは横浜開港期の趣が感じられる。シーンに合わせて英国風酒場やレストランなども楽しめるので、ぜひ行ってみては！

(中国語学科4年 柳川寿桃)



②コーヒーの大学院 ルミエール・ド・パリ

横浜スタジアムの近くに佇む一際上品な雰囲気を放つ喫茶店、「コーヒーの大学院 ルミエール・ド・パリ」。入ってすぐのフロアには茶色を基調とした空間が広がり、落ち着いたくつろぐことができる。更に奥に進んでいくと先ほどとは少し変わってゴージャスな照明と絵画など、中世ヨーロッパを感じさせる雰囲気が広がる。コーヒーだけで20種類以上あり、コーヒー好きにはたまらない！！アンティークな食器を使用しており、中世の貴族になったかのような気分を味わえる。静かでゆったりとした雰囲気の店内で一人様でも楽しめます。

(中国語学科4年 太田有美)



②コーヒーの大学院 ルミエール・ド・パリ

横浜スタジアムの通りにある1974年創業の喫茶店。上品かつレトロな内装は、ゆったりと過ごすのにぴったり◎



③ cafe de lento

アンティークな家具と落ち着いた雰囲気はほっと一息。土日は行列もできる人気店！



③ cafe de lento

焼きいちごのタルトが有名なカフェ「Cafe de lento」。タルト生地は香ばしくザクザクで大粒の焼きいちごがふんだんに使用されている。キャラメルとチョコレートのタルトも甘すぎず奥深い味わいだ。タルトは日によってメニューが異なるため、その日の気分に合わせて何度訪れても楽しむことができる。木目のテーブルが印象的な店内は落ち着いた雰囲気、ゆったりとした時間を過ごすことができる空間だ。店内には読書をしている人や会話をを楽しむ人などがおり、気軽にふらっと立ち寄りたいカフェだ。

(中国語学科4年 山田あゆみ)

④バイミースタンド

ホットサンドやアメリカンなサンドウィッチが有名なカフェ「BUYME STAND MOTOMACHI」。

ミントグリーンを基調とした店内では、ヴィンテージ風なソファやランプなどのインテリアが目を惹く。特に人気なメニューはフルーツが入った「アップルチーズ」や「ブルーマンデー」で、どのメニューも斬新でボリューム満点な唯一無二のホットサンドだ。さらに、元町店には卵とベーコン、チーズが入った限定ホットサンド「エグチ」も。卵が甘めの厚焼き卵でチーズのしょっぱさも相まって絶品だ。

(中国語学科4年 樋渡みほな)



ゼミナールⅠ

「演劇の〈ことば〉を考える」

国際日本学部 日本文化学科 3年

宮崎 亜美

国際日本学部日本文化学科の深澤ゼミは、日本の伝統演劇から西洋の演劇まで、演劇そのものを研究対象とするゼミです。主な活動として、演劇に関する本を精読して演劇に対する理解を深めたり、実際に劇場に赴いて観劇したりしています。今年度は、河竹登志夫による『演劇概論』（東京大学出版会、1978）を用書に定め、演劇を構成する本質的な要素について学びました。また、課外活動として、赤坂の草月ホールで行われた音楽座ミュージカル『ラブ・レター』、駒場のこまばアゴラ劇場で行われた第27班『ハヴ・ア・ナイス・ホリデー』という二作品を鑑賞しました。本報告では、『演劇概論』の精読と『ラブ・レター』の鑑賞という二つの活動についてまとめます。

『演劇概論』は、演劇を総合的に捉えた概論書です。内容は章ごとに分かれていて、演劇観の総論、演劇を構成する諸要素についての各論、日本と世界の演劇史について述べられています。今年度は演劇観の総論と



「音楽座ミュージカル」（於：赤坂草月会館）観劇のあとで

演劇を構成する要素についての各論までの内容を中心に精読しました。ゼミでは、当日までに決められた範囲を読み、自分の考えや疑問をまとめておきます。そして、当日、自分の考えと先生の考えと照らし合わせたり、疑問について先生と討議したりしています。加えて、文中で登場した演劇の戯曲や関連する論文を読んだりもします。例えば、演劇分類について学んだ際には、具体例として登場したイブセンの『人形の家』を読みました。この活動によって、演劇に対する理解が深まるほか、文章を批判的な態度で読む力や戯曲を読む力が身に付きます。

音楽座ミュージカル『ラブ・レター』は、原作である浅田次郎の短編小説をミュージカル化した作品です。この作品は人とのつながりを繊細に描いていて、舞台上で役者たちが紡ぐストーリーには心を揺さぶられました。観劇を終えた後は、それぞれの印象に残ったシーンや工夫されていたと思うシーンなどを話し合います。この意見交換は、自分にはない発想を聞くことができ、作品の理解を深めることにもつながるため、非常に充実しています。また、実際に劇場に赴いて観劇すると、演劇の一瞬性を肌で感じるができます。こうした経験は、研究室で本や論文を読んでいるだけでは得られないもので、演劇を研究する上で必要な経験だと私は思います。

以上、深澤ゼミの活動内容についてまとめました。演劇は扱えるテーマが幅広く、大変なこともあります。が、先生が親身になって相談に乗ってくれるため、自分の興味関心に沿った研究に取り組むことができます。また、観劇など普段できない体験ができることもこのゼミナールの魅力です。

文献講読演習「曾我物語を読む」(担当教員・深澤徹) 活動報告

2022年度の「文献講読演習」では、NHKの大河ドラマ「鎌倉殿の13人」にちなみ、半年かけて曾我の五郎・十郎の敵討ちを題材とした『曾我物語』のテキストを原文で通読しました。そのからみで、6月5日には一日かけて、舞台となった鎌倉の街をフィールドワークしました。『曾我物語』はまた、能や歌舞伎の「曾我もの」演目としてアレンジされてもいるので、7月10日には、演劇のメッカとして知られた下北沢の街の近くにある「駒場アゴラ劇場」で、劇団「第27班」による「ハヴ・ア・ナイス・ホリデー」という演目を鑑賞して、現代の演劇空間を体験しました。

これら二つの活動の後は、最寄りの飲食店で飲み食いしながら（コロナ感染拡大の前です）、楽しく振り返りの時間を持ちました。以下は参加者による、それぞれの体験記です。

* * *

◆早坂葵 深澤ゼミでは曾我物語をテキストとして読み進めてきたが、視点を少し変えるだけで物語はその表情を変え、私達に新鮮な体験をさせてくれる。真名本や仮名本を読み比べながら、意見を交換し合う楽しさをこのゼミを通して学ぶことが出来た。実際に自分達の足で史跡を巡り、作品をより身近に感じていくことは物語を深く味わうことに繋がるのである。

私達は今回フィールドワークの一環として、こまばアゴラ劇場へと出向いた。鑑賞した芝居のタイトルは「Have a nice holiday」。とてもありふれた言葉に見え

るが、その本当の意味に気付いた時、我々に寄り添ってくれる言葉へと変化していく。一つのステージ上で照明を切り替えながら幾つもの場面が進行していくのだが、観客に少しも違和感を覚えさせない演技に圧倒された。小劇場ならではの空気感が漂い、まるで一本の映画を観ているような感覚に陥らせる、そんな魅力があった。この作品も自分達の目で見たからこそ得るものがあつたと強く感じる。

◆長谷川朱羽 過疎化した地域に移住した若者のみ手に入れることができる「不老薬」を得た若者たちが、時間に追われず自由に夢を抱いて生きることを選択した代償とは何かという作品内容であつた。医療技術の発達で「不老薬」の開発に直面の可能性がある現代に対して鋭い視点が向けられていた。「自由と愛は矛盾する」という台詞で、不老によって自由な長い時間を得た故に愛による新たな命の誕生が犠牲になることに気づかされた。

また若者たちだけでなくハチという生命の登場で「子が生まれて親が死ぬ」という本来の生命原理の喪失は生命活動にとつての「休息」にあたるのではないかと問われたように感じられた。作品に登場する同性愛者や仕事に生きる人を現代社会の様々な立場の人と重ね合わせることで、現代がこの「生命活動の休息」に突入しつつあることを訴えるのが『ハウ・ナイス・ホリデー』の真意ではないかと思つた。今回芝居を見たことで話の真意を考察する大切さを改めて学んだ。

◆雨宮裕貴 私は今回『ハウ・ナイス・ホリデー』を鑑賞するにあたって、題名にもある「休日」が劇中でど

のように描かれるのかに注目していた。そして劇中で示された休日の意味とそれをもとに自分が考察したことがある。本作品における「休日」とは、「生物の本能的な仕事ともいえる、子孫を生み自らの遺伝子を残すという行いを休むこと」と説明されている。劇中では服用したものを不老にする不老薬と、それに伴う不妊症が登場している。特に子どもを残すことを仕事同然と考えていた「花の女」にとってこの不妊症は「休日」なのであろう。

また、劇中には「踊る女」に同性の恋人がいたことが示されたり、「運ぶ男」と「歌う男」との間に同性愛的な表現が見られる。自分はこの同性愛に関する描写からも、生物における「休日」が読み取れると考えた。近年では同性愛に対する人々の見方も変わってきており、社会に受け入れられるようになった。しかし、同性同士のカップルは子孫を残すことはできない。同性愛という選択をとることで、生物の仕事である「遺伝子を残す」という行為をやすむこともまた、「休日」であるといえるだろう。なぜ、このような表現がされているのだろうか。

近年の日本では出生率の減少が深刻な問題として取り上げられている。これは一般的に悪いこととしてとらえられているし、実際に社会的には出生率が高いほうがいいだろう。しかし、この問題を生物における「休日」ととらえることで必ずしも悪い面だけではないというメッセージが込められているのではないのだろうか。

◆青木奈緒子 私たちは7月10日、文献購読演習のフィールドワークの一環としてこまばアゴラ劇場に『ハウ・ナイス・ホリデー』という劇を見に行った。

この劇は、過疎化した地域でのみ若者が買うことが出来る、飲むと老化が止まる「不老薬」という薬を求め、村に集まった人々の物語である。少子化や過疎、愛などをテーマにした作品であり、かなり考えさせられる作品となっていた。特に劇中の会話で「相手のことを考えない愛情はただの迷惑である」や「自分の優しさを理由に現状から逃げていく」といった内容の言葉があり、会話はメインの場面ではなかったが、とても印象に残り、痛いところを突かれたような気がした。

その後の劇の感想会では、様々な感想や意見があつた中で、ハウ・ナイス・ホリデーという題名の意味の、かなりの射た考察が上がるなど有意義なものとなった。映像ではない実際の舞台はプライベートでは中々行くことがないため、今回の授業を通して実際に見る事が出来て貴重な経験になった。



駒場アゴラ劇場で観劇



朝比奈切通しを探索中



鶴岡八幡宮社頭 (狛犬さんもマスク)

川崎大師の石造物調査と体験型学修プログラム

国際日本学部 角南聡一郎

川崎区誌研究会との出会いは、2021年度の民俗調査実習で川崎大師（金剛山平間寺、真言宗智山派大本山）所在の石造物の見学を計画した際に、何か参考となる文献はないか調べたことに始まる。検索の結果、同会の石造物調査部会の一員である金井晃先生を中心として、2008年から2011年にかけて境内石造物調査がなされ、2014年に報告書が刊行されていることを知った（金井晃ほか2014『川崎大師石造物調査報告書』川崎区誌研究会）。そこで、同会会長の小泉茂造先生に電話連絡をし、報告書の入手方法と民俗調査実習へのご協力をお願いした。そして、11月7日に小泉・金井両先生に川崎大師の石造物をご案内いただいたのである。

川崎大師で、両先生に今後の角南ゼミの学生と川崎区誌研究会との交流の可能性について、相談をさせていただいた。金井先生によれば、前回の報告書に収めきれなかった資料や石造物の移動などがあり、補遺編を作成したいという考えがあるとのことであった。同会は長く郷土川崎について調査してこられた、シニア世代が



川崎大師での現地調査のようす

中心である。しかし、同会の活動は、近年のデジタル化の波には十分に対応できておらず、コロナ禍で活動は休止中であるという。一方で大学生には調査研究の経験は未だないものの、デジタルネイティブ世代として教員やシニア世代よりもはるかに、デジタル化社会に適応して情報の整理や発信をするリテラシーが備わっている。これら異なる世代が、同じ対象について調査をおこない情報を蓄積するということは、相互補完的関係となりうることで、協力して調査報告書を作成することが、可能となるのではなかろうかと考えた。

金井先生は、これまで多くの石造物調査を実施し、成果を公表してきた在野の研究者である（金井晃1980『倉渕村の道祖神』金井道祖神研究所、金井晃1982『神奈川県道祖神調査資料集1』金井道祖神研究所、金井晃1985『鶴見石工の系譜』『日本の石仏』33, 35, 103など）。金井先生にご案内いただいた民俗調査実習履修生2名が、2022年度より角南ゼミの所属となった。両名は実習で習得した調査方法を参考としながら、自らの研究テーマに取り組んでいる。こうした結果からすれば、学生たちは金井先生の詳細で熱のこもった石造物の解説に、心を打たれたのではないかと思われる。

2021年度から神奈川大学「体験型研修」の新規プログラムの開発に伴うプロジェクトがスタートし、角南はこれに参加している。2023年度を目標に共通教養科目の一つとして「体験型研修」の授業を開講すべく、石造物関係の授業準備をおこなっている。石造物を対象とするのは、調査を通じて地域の歴史や文化を知ることができること、他の文化財と比して石造物が調査しやすいことなどがあげられる。そこで角南ゼミ

ナールでは2022年度より、金井先生にご指導を仰ぎ、「体験型研修」の新規プログラム開発の予備的作業も含めて、川崎大師石造物の補遺調査を実施することとなった。我々からの調査のお願いに対して、川崎大師は快く許可してくださった。

2022年6月11・12日から土日などを利用して、角南とゼミ生は金井先生とともに調査を開始した。期間は1年間で予定している。当日は、NPO法人かわさき歴史ガイド協会の副理事長藤田智恵子氏も参加された。同協会は現在、川崎大師境内の歴史ガイドを担当している。藤田氏からガイドする際に、境内石造物のガイドブックのようなものがあれば便利だという話題が出た。報告書が刊行されれば、それをもとにガイドブックを作成することも可能ではないかと考えている。この調査を契機として、文化財調査に留まらず、その活用も視野に入れてゼミ活動を進めていきたい。いずれにせよ、金井先生をはじめとして、協会の皆様、川崎大師の皆様にお世話になりながら、調査を継続していく予定である。

国際文化交流学科観光文化コース 演習「ことりつぶ」

―軍港・横須賀を“観る”―

国際日本学部 国際文化交流学科3年
（高井ゼミナール） 春田 菜々美・
石塚あかり・渡辺真由・酒井那実

【はじめに】

国際文化交流学科観光文化コースでは2年次の「コース演習I」で「ことりつぶ」と称したフィール



横須賀軍港めぐりにてクルーズ船から見た艦船

軍港としての横須賀の誕生は、ペリー来航以降、横浜の開港とともに様々な人たちが日本へやってくる中、東京湾の守りを固めるために造船所が作られたことがきっかけになっています。軍港めぐりクルーズでは、船の左右に次々あらわれる日米の艦船を見ながらガイドさんが歴史や船の説明をしてくれます。ガイドさんによると、軍港クルーズは観光客だけではなく横須賀市民のみなさんにも愛されているそうで、ことりつぷ当日の日曜日も幅広い年齢層の方々が乗船していました。横須賀本港はアメリカ軍の敷地であり、異国情緒が感じられました。軍港に馴染みのない人にも分かりやすいようガイドさんが説明してくださったの

【軍港クルーズ】

で、軍港についての知識を実物を見ながら得ることが出来ました。何より、間近に見る各種艦船の迫力に圧倒された45分間でした。

【ホテルメルキュール横須賀】

横須賀市民も多く利用するホテルメルキュール横須賀の最上階レストランから米軍基地や軍港を眺めながらコース料理を頂きました。当日もレストランには多くのお客様が訪れていました。同ホテルは、米軍関係者の出張利用、そして地域住民のみなさんの利用によって、コロナ禍でも業績に大きな打撃を受けなかったそうです。昼食後は普段はなかなか見ることができないホテルのバックオフィスを見学させていただきました。私たちにとって

は、観光業の舞台裏を知る貴重な機会だったと思います。



総支配人の猿山新二さんとスタッフの齋藤桂子さん、2年生、3年生

【猿島 島内ガイドツアー】

猿島は明治期に作られた要塞と手つかずの自然が残された、東京湾唯一の無人島です。ガイドさんの説明を聞きながら島中を散策して「見る」だけでは「観る」ことのできない観光を楽しむことができました。要塞跡が残る自然豊かな魅力的な猿島を後世まで守り続けていくと同時に、横須賀市が抱える財政難を考えれば猿島の観光事業推進も重要です。両方のバランスをと

りつつ、観光地化の推進によって生まれる新たな課題

【おわりに】

「見る」と「観る」の違いは何でしょうか。それはただモノを「見る」一方で、そのモノが持つ意味を知った上で「観る」という違いがあります。今回の高井クラスのコース演習では「観る」をテーマにした上で、軍港・横須賀のさまざまな姿を「観」ました。観光業界にも興味がある学生たちが、ある場所を「観る」視点を持つことは大切なことだと考えます。3年生は2年生の時に参加者側としてことりつぷに行きました。今回はサポート側として、しおり作成や現地での誘導を行い、引率教員の大変さを知ることでもできました。また、軍港めぐりと猿島で、それぞれ専門的知識とともにエンタテイメント性を併せ持つガイドさんに案内をしていただき、観光客が「観る」観光を実践するために、ガイドという職業が重要な役割を果たしていることを実感しました。学生のなかには将来的に観光業界でお客様をガイドする仕事に就く人がいるかもしれません。その点からも、現地に赴いたからこそこの発見が生まれた「ことりつぷ」の一日でした。



明治時代に使われていた要塞と手つかずの自然に囲まれている

「角山ゼミナール課外授業

〈生誕100年朝倉撰展〉鑑賞／女性画家の好奇心と信念に触れて」

国際日本学部 国際文化交流学科 3年

太田 千翔子

ゼミナールでは、講義の一環として、実際に美術館に出向き作品の鑑賞を行った。我々は、5月14日に神奈川県立近代美術館葉山で開催された「生誕100年朝倉撰展」を訪れた。この展覧会は、画家・舞台芸術家として活躍した朝倉撰の初の回顧展である。初期の日本画から戦後の印象画の時代を経て、舞台芸術や絵本・小説の挿絵など多岐にわたる作品が時代の変遷とともに展示されていた。展覧会では、絵画作品を通して、当時の時代背景や朝倉撰自身の人生を感じ取ることができた。また、絵画作品だけでなく、素描や舞台模型、デッサン画といった、作品が出来上がるまでの過程部分も見ることができた。全体を通して、とても見応えのある展覧会であった。

まず、朝倉撰の作品を見て一番驚いた点は、時代とともに大きく変化する作風であった。見て回る中で、まるで複数の画家の作品を見ているかのような錯覚に陥った。一人の同じ画家が描いたと分から



神奈川県立近代美術館葉山館の外観

ないほど、タッチや描くモチーフが生涯を通して変化していると感じた。良い意味で固定の作風や絵の癖が見られないとも思った。特に、絵本の挿絵や舞台美術の分野では、どれも作家や作品の持つ世界観にぴったりの画風で描かれている点に感動した。

また、1日1枚、欠かさずにスケッチを行っていたことや空間把握能力の高さによりデッサンがとても上手いという印象を持った。写生の技量の高さのおかげで、繊細な線で描かれた日本画はより洗練されて見えた。そして、戦後に描かれた印象画のような作風の時代もどこかリアルさが残るものになっていた。

私自身が聞かれて一番悩むのは、この展覧会の中で、一番印象に残った作品は？という質問である。その理由は、本展覧会では、何か一つの目玉作品を目立たせて見せるのではなく、全体の変化や作風の違いを際立たせるように作品が展示されていたからである。ここからは、章ごとに作品の印象について感想を述べていく。

第1章の入り口すぐのところに展示されていたのは、初期の作品である大きなキャンバスに描かれた日本画であった。「更紗の部屋」、「飲び」と題された作品は、どれも日本画ならではの美しさ・繊細さと女性たちの可愛らしさ、日本画なのにどこかポップな色合いが印象的だった。大きい作品にもかかわらず、人や自転車のバランスは正確に描かれていた。一方で、デッサンとは異なりどこかデザイン性を感じるタッチでこれまで見たことのない作風であった。全部の章を見終わった後に振り返ると、一番色合いやタッチが初々しく、明るさや弾けるようなみずみずしさをより感じたく、朝倉撰が社会の矛盾や戦後の暗い状況など様々な苦悩や問題に影響を受ける前の絵画として、彼女が純粋に

描きたいものを描きたいように、その中でも女性たちの素朴でありのままの美しさを描きたいという思いが汲み取れた。

第2章はメッセージ性が強く、荒々しく、暗めの色彩の作品が多く見られた。この章の作品を鑑賞して、感情が大きく揺さぶられた。そのため、戦後の時代に絵画を通して、社会全体に問題提起を投げかけようとしていたのではないかと感じた。また、社会の現実や悲惨な出来事（戦後の日本社会に蔓延る差別や貧困といった問題）から目を背けず、真正面から向き合って描くことで、当時の人々だけでなく私たちのような後世の人々にもその様子を伝えようとしていたのではないかと考える。炭鉱で働く人や戦後の貧しい生活に耐える人が多く描かれていたが、日本画の特徴の顔料によるキラキラして見える質感が、現実とのギャップや相反するイメージを持つていて強く印象に残った。

次に、美術館の建物や展示空間についての印象を述べていきたい。今回訪れた神奈川県立近代美術館は、神奈川県葉山町に所在し、海と山に囲まれた自然豊かな場所に立つ美術館であった。美術館の周りにもゆとりとした時間が流れており、都会に立つ美術館が持つ喧騒の中の静寂という非日常空間とはまた違った落ち着きや静かさを感じる空間であった。自然に溶け込むようなシンプルで明るい外観で、美術館特有の重々しさがなかったため、誰でもより気軽に立ち寄って芸術作品に触れることができると感じた。また、ホワイトキューブという展示方法で、作られた年代順に作品が展示されていたため、作品の時系列や時代背景の変化が分かりやすかった。スケッチブックの見開きページやエレベーションなど下絵の段階の作品も展示され

ていたことで、朝倉撰の写実力の高さがより顕著に見えた。

作品を全て見終わって出口に向かう途中に、朝倉撰自身の写真が飾られていた。こんなに明るくて綺麗な女性が描いていたのだとこれまでの作品と彼女の生涯がリンクしたようで印象に残った。よくアーティストは孤独な人が多いと言われているが、彼女は人と関わることや人そのものにとっても関心があつたという印象を受けた。また、どの作品からも大きなエネルギーを感じた。その中には、彼女の創作に対するエネルギーと作品に描かれた人々が持つエネルギーの両方があるのではないかと考えた。そして、戦後の苦しい状況の中で絵を描き続けるとはどういうことなのかということを考えさせられた。これは、朝倉撰自身も悩み苦しんだ問いなのではないかと感じた。そして、彼女は、絵を描くことを通して厳しい現実にも希望を見出そうとしていたのではないかと考えた。同時に、彼女の作品を鑑賞して、苦しい状況の中でも描きたいという正直な気持ちに向き合い、自分の「好き」をとことん貫いていたのではないかと感じた。彼女の好奇心や信念のおかげで、多くの作品から挑戦やエネルギーといったイメージを感じることができたのではないかと考える。



ゼミ生の集合写真

秋葉原見学レポート

国際日本学部 日本文化学科 3年 松本 悠里圭

10時半に秋葉原駅に集合し、秋葉原駅周辺のオタクカルチャーが詰まった部分を散策しました。散策時、広告の種類が渋谷や東京駅などかなり違うことが印象に残りました。振り返ってみると、広告含めガチャポンやBGMなど、中心に据えられているキャラクターや歌手は、女性のものが多かったように思います。電気街と呼ばれる地域でも、電子機器以外に売られていたタペストリーやポスターは女の子キャラのものが多く、かけられていた音楽も女性が歌手を務めているものだったように記憶しています。対して、JR秋葉原駅の近くにあるラジオ会馆4階の「anime」では、少年漫画などのグッズも多く取り扱われていました。印象に残っていたのは、電気街のようなキャラクターの取り扱いにおいて女性キャラが多いテナントでも、「anime」のような複合的な店舗でも、人気アニメ「鬼滅の刃」のグッズが取り扱われていたことです。水着の女の子たちのガチャガチャに混ざった竈門炭治郎ら鬼殺隊の面々は鬼ではなく、何か違うものと戦っているような、長男だから立ち続けられているような、ある種の異様さを感じました。アニメ効果というのは私たちが思っている以上にキャラクターの活躍の場を広げているのかも知れません。

休憩を兼ねて「入国」しためいどりーみんというメイド喫茶は、単身利用のお客さんが男性しかいなかったことが印象に残っています。また、ゼミ生の一人が「単身では来店しづらい」といった趣旨のことを言っていたことから、メイドというカテゴリーがオタ

クの象徴のようにいて、未だ門戸が広くひらかれたカテゴリーに至っていないのだと感じました。また、来店時のルールとして、離席の際にメイドへの声かけが求められていたのも、コンセプトカフェの特徴を感じました。「にやんにやん」の声かけの元、メイドさんをお手洗いに立つというシステムのものでした。やはりメイドというキャラクターを消費する商売だからこそトラブルが起こりやすいのか、トラブル防止に繋がる工夫なのだろうと思いました。同じテーブルのゼミ生らがアイスフロートを注文している中、ひとりオムライスを注文した私ですが、卵が薄焼きだったことを除けば大変満足なオムライスでした。卵は半熟が好きです。キッチンには日曜日の昼ごろと繁忙が予想できるタイミングにも関わらず2名体制。対してフロアのメイドさんは4名は常におり、飲食店と考えると大変心もたないスタッフ体制と感じました。しかし、ここはご主人様の帰国を待ち侘びたメイドたちの国、飲食を扱うとはいえ飲食店とも言えず、コンセプトカフェと言われることもあるものの、カフェとも異なるものを感じました。メイド喫茶という空間は食べ物でも、休憩どころでもなく、メイドを求めて足を運び、メイドを消費する空間なのだと思います。

最後に足を運んだ明治大学内、米沢嘉博記念図書館



めいどりーみん LIVE RESTAURANT Heven's Gate
店の店員さんと一緒に記念撮影

のギャラリーの蔵書も大変面白かったのですが、一番印象に残ったのは、一階に展示されていた2004年にベニスで開催されたOTAKU: persona = space = cityをテーマにした世界的会合で披露されたコミケのサークルカットを配置した模型です。サークルカット、いわゆるサクカに描かれている作品の数々に年代を感じることが勿論なのですが、『テニスの王子様』の手に広さに驚きました。隣接する『BLEACH』や『ONE PIECE』も参加サークル数は多いのですが、圧倒的な『テニスの王子様』。あそこも、ここも、王子様。この王子様たちは一体どこまで行くのかと思った程度でした。他にも、お誕生日席と呼ばれることの多い部分にサークルが並び立っていた点が意外でした。赤ブーが開催する即売会では1または2サークル程度の部分に4も5もサークルが並ぶほどで、夏場にこのぎゅうぎゅう度合い、制汗剤等のCMにびつたりなのではないかと思いました。

以上が私のアキバ見学の感想です。稚拙な文ではありますが、少しでも私が見たアキバの一味違う空気感、オタクカルチャーの有り様を感じて頂ければと思います。

島川ゼミナール活動報告 〜観光の現地現場にこだわる〜

国際日本学部 国際文化交流学科 観光文化コース
3年 渡邊 真子

私たち島川ゼミナールは、半期の間様々なことに取り組み、学際的な学びを深めてきた。本稿では、他にはないゼミナール活動の全容を紹介していきたいと思う。

【JR東日本×南伊豆町役場×島川ゼミナール 産学連携プロジェクト「南伊豆観光振興を考える」】

突然だが、南伊豆町に訪れたことがある読者ほどのくらいいるのだろうか。静岡県東部伊豆半島の最南端に位置する南伊豆町。横浜から電車で行くとすると、熱海や伊東を通り過ぎ伊豆急下田駅に着いたら、そこからはバスや車で移動するというのが基本的なルートとなっている。この一連の移動に合計で三時間ほどかかり、横浜から南伊豆町との間に熱海や伊東などといった有名観光地があるため、南伊豆に至る手前が最終目的地となっている人も多いのではないだろうか。実際、JR東日本が私たちとブレゼミナール生を対象に取ったアンケートでは、「南伊豆町に行ったことがない」「よく知らない」という人が少なかつた。そうした現状を抱えている南伊豆町を観光の視点からどのように振興させるかということが本プロジェクトの目的であり、JR東日本の販売促進課で観光開発をしている方々と、半期の間考察を重ねてきた。また、岡部克仁南伊豆町長をはじめとする町役場の方々も全面的に協力してくださっているため、私たちは自由な発想でプロジェクト提案を考えることができています。

私たちが観光振興を考えるにあたり、元藤沢市長の海老根靖典さんが「地方自治体の経営



JR東日本さんによるレクチャー（この方も14年前の島川ゼミ卒業生）

と地域活性化において大切なこと」をテーマに特別講義をしてくださった。その中でもとても印象的だった言葉がある。それは、「答えは現地現場に落ちている」という言葉だ。インターネットの普及により、大抵のことは調べれば何でも分かる時代になった。それはそれでありがたいことだが、やはり現地現場に赴いて自身の肌で感じることでしか知り得ないこともあるだろう。頭の中で考えたイメージだけでは現実性に欠け、机上の空論になってしまう恐れがあるということも危惧しているのだ。当たり前のことかもしれないが、基本に立ち返った時にとっても大切なことなのではないかと感じた。私たちは、プロジェクトの一環として夏休みに南伊豆町を訪れる。その際、現地現場に行つたからこそ分かったことを大切にしながら、その地域の観光振興を考えていきたいと思っている。

そして、そういったお話や島川教授のアドバイスを踏まえ、私たちは四つのチームに分かれ、「ソロキャンプ」「Google ストリートビュー」「鉄道とバスのスムーズな接続」「民宿の魅力発信戦略」の方向性からプロジェクトの提案を考えている。現地訪問を終えてから行う具体的な提案の報告をぜひ楽しみにしてほしい。

【旅行業、公務員、観光エンタテイメント それぞれの道へ】

私たち島川ゼミナールでは、大学卒業後の進路を見据えて「旅行業志望組」「公務員志望組」「観光エンタテイメント志望組」の三つの部門に分かれ、授業時間内外に徹底対策を行っている。

まず「旅行業志望組」は、総合旅行業務取扱管理者の資格取得に向け、JT B総合研究所の課外授業と、

島川教授からのポイントを押さえた指導を受け、「全員合格」を目標に掲げ日々試験勉強に励んでいる。総合旅行業務取扱管理者資格は国家資格の一種であり、この資格の保持者は、旅行業者の営業所で顧客と旅行取引をする際、国内と海外両方の旅行商品の取引における責任者となることができる。つまり、有資格者は旅行会社等において重宝されるため、旅行業界を志す学生は、就職活動に向けて

現段階から取り組んでいる。

「公務員志望組」は、特定の地域の活性化に貢献したい学生や、地元に戻って観光まちづくりを行いたい学生が集まっている。9月に日光市を訪問し、市役所で観光政策のレクチャーを受け、地元の観光まちづくりNPOの方々とディスカッションをすることを予定している。また、後期には神奈川県神奈川県の観光課と連携して、観光政策を実地で学ぶ実習も予定している。そして、そこで得た知見を実際に自分のフィールドで生



ハイアットリージェンシー横浜でアフタヌーンティー



リーダーシップとチームワークを実地で学ぶ八景島ヨット研修

かすべく、地方自治体職員になるための公務員試験対策をチーム一丸となって取り組んでいる。

また「観光エンタテイメント志望組」は、イベントのMCや番組のナレーターを養成・派遣している会社に登録をし、アナウンススキルを習得すべく研修に励んでいる。そして、大学の夏休み期間中は精力的に研修に取り組み、3年生の後期には何かしらの形で現場に出るということを目標にしている。筆者はこの部門に該当しているのだが、将来的に添乗員として働くことも視野に入れているため、人前で堂々と話し、お客様に喜んでいただくことをさらに極めていきたいと考えている。

このような三つの部門に分かれてそれぞれの道に向かって対策を行っているが、最終的には皆旅行業・観光分野に携わりたいという共通の思いのもと、日々勉強や研修に取り組んでいる。

以上、島川ゼミナールの紹介をしてきたが、本ゼミナールが他にはない活動をたくさん行っているということが分かっていただけただろう。今後ぜひ、私たちの取り組みに注目してほしい。



全員集合

プラスアイ編集スタッフ募集中！

人文学会学生会部会発行の「PLUSi」の企画・編集に携わりませんか？
月に2回ミーティングを開催しています（主にみなとみらいキャンパス）。
詳しくは <http://human.kanagawa-u.ac.jp/gakkai/intro/index.html> まで
また秋には「学生文化奨励賞」も開催しますので、奮ってご応募ください。

